

大粒で良品質・良食味の水稲糯新品種「ふさのもち」の育成

長島 正^{*1}・林 玲子・西川康之・斎藤幸一^{*2}・
和田潔志^{*3*4}・小山 豊・渡部富男^{*3}

キーワード：水稲，糯品種，大粒，良食味，玄米品質

I 緒 言

千葉県における糯品種の2007年の作付け面積は1,700haである。千葉県の糯品種の作付け面積は北海道や佐賀県、新潟県などのもち米の大産地に比べて少ないが、関東地方では最大の生産県である。

千葉県で生産され市場に流通するもち米は、海匝地区を中心に作付けされる早生の奨励品種「ヒメノモチ」などである。一方、県内には海匝・東葛飾・千葉地区を中心に作付けされる晩生の奨励品種「ツキミモチ」のように市場外流通する品種がある。「ツキミモチ」は地域のもち加工業者やもち米生産者によりもちやあられ等に加工され地元を中心に販売されたり、もち米が道の駅などで直売されることも多い。都心に隣接し県内に600万人の消費人口を抱える千葉県では、このような地場消費は市場流通と並んでもち米やもち加工品の重要な販路のひとつとなっている。

県内における糯品種の作付け割合を見ると、早生の「ヒメノモチ」が糯品種の作付けの52%、晩生の「ツキミモチ」が33%を占めている（千葉県農林水産部生産販売振興課，2009）。

もち米の消費は12月から翌年の1月に集中するため、早期出荷の有利性が小さいことから、もち米生産者は粳品種との収穫作業の競合を避けることに主眼を置いて、糯品種を選択しているものと考えられる（米穀安定供給確保支援機構，2010）。

本県で多く栽培されている奨励品種の「ヒメノモチ」は、多収で玄米の外観品質が良く、もち色も優れているが、耐倒伏性が弱く穂発芽しやすいため玄米品質の変動が大きい。一方、1966年に奨励品種に採用された「ツキミモチ」は、多収で、ついたもちの伸びが良く食味が良いが、耐倒伏性が弱く、玄米が小粒で外観品質はやや不良である。また、「ツキミモチ」は、出穂が不揃いで、原種生産や採種農家

の栽培管理における大きな問題点とされている。

このような背景のもと、筆者らは栽培しやすく、玄米外観品質やもちの食味が良好な糯品種の育成に取り組み、「ココノエモチ」を母本、「白山もち」を父本として耐倒伏性やいもち病に強く、穂発芽しにくい栽培特性を有し、大粒で玄米外観品質やもちの食味が良好な「ふさのもち」を育成した。「ふさのもち」は中生品種であるが、移植時期を調整することで晩生品種「ツキミモチ」の代替として経営に導入することが可能である。

ここに本品種の来歴、育成経過及び特性の概要について報告する。

なお、品種育成にあたり、奨励品種決定調査の基本調査及び現地調査で担当された千葉県農林総合研究センター生産技術部水田作研究室（以下千葉市とする）、同育種研究所水稲育種研究室成東育成地（以下山武市とする）の関係各位、並びに現地調査の担当農家である干潟町（現旭市）の堀江勇造氏、栄町の鈴木芳一氏、大栄町（現成田市）の宮野茂氏、佐倉市の三門増雄氏には多大なご協力を頂いた。また佐原市（現香取市）の坂下製菓、九十九里町の中村製菓、干潟町（現旭市）の大新食品株式会社にはもちに関する情報やもち加工についての助言ともちの加工試験に多大なご協力を頂いた。ここに記して深く謝意を表する。

II 育成経過

1. 育種目標及び交配

新品種の育成にあたり、育種目標を耐倒伏性、耐冷性及びいもち病抵抗性が強く、穂発芽しにくいなど栽培特性に優れ、玄米が大粒で外観品質が良く、もちの食味が良好な品種とした。

「ふさのもち」の系譜図を第1図に、育成経過を第1表、第2図に示した。

交配組合わせは、中生でいもち病抵抗性や耐倒伏性に優れ、ふ先色があり、玄米外観品質が良好な大粒の「ココノエモチ」（赤間ら，1988）が交配母本、晩生で耐倒伏性が強く、玄米外観品質、もち質が良好な大粒の「白山もち」（松本ら，1988）が交配父本である。交配は1994年8月に佐原市（現香取市）にある千葉県農業試験場北総営農技術

受理日2011年8月22日

^{*1}現千葉県農業大学校

^{*2}元千葉県農林総合研究センター

^{*3}元千葉県農業総合研究センター

^{*4}故人

